平成３０年度８０２０公募研究報告書抄録（採択演題：18-4-14）

研究課題：肺がん患者への周術期における口腔機能管理の有用性に関する研究

研究者名：西川雅也[1)]，山口　聡[1)]，中道瑛司[1)]，村瀬由加里[2)]，齋藤あゆみ[2)]
所　　属：1)名古屋大学医学部付属病院　歯科口腔外科
2)名古屋大学医学部附属病院　医療技術部臨床工学・歯科部門

【緒言】本邦において肺がんは男性においては死亡者数で第一位，女性では第二位，男女計では第一位であり，罹患率では男性で第二位，女性で第四位，男女計では第三位となっている．

また，肺がん患者においてはその罹患率の高さのみならず，術後の呼吸器感染症の発症率が2～20%，術後合併症からの致死率は22～67%と高率である．

このため，われわれは肺がんに着目し，肺がん患者における口腔機能管理の有用性および，セルフケア指導の効果の良否が与える影響を検討した．

【対象と方法】2015年4月～2018年3月までに，名古屋大学医学部附属病院呼吸器外科において手術を行った原発性肺がん一次症例632名である．当科で口腔機能管理を行った173例を管理群，口腔機能管理を行わなかった459例を対照群とし，年齢，性別，喫煙歴，術前呼吸機能検査結果，肺がんの病期，肺がんの組織型，手術時の切除範囲，胸腔鏡使用の有無，手術時間，出血量，在院日数，採血データ（術前，術後1日目，術後3日目のアルブミン値，総タンパク量，白血球数，CRP），経時的な熱型，術後肺炎の有無，術後肺炎の診断日，術後肺炎に対する治療，行われていれば細菌培養の結果，管理群における歯周組織検査の結果，口腔機能管理の回数およびその内容についてカルテ記載より抽出し，統計学的検討を行った．

なお本研究は名古屋大学医学部附属病院生命倫理委員会の承認（承認番号 2018-0270）を得て行われている．

【結果】対象の632例の患者背景に差異はなく，術後肺炎の発症に関する因子について単変量解析を行った．$p<0.1$の項目は，術前のアルブミン値，術前の呼吸機能検査の結果，病期，組織型，口腔機能管理であった．これらの項目を独立変数とし，術後肺炎の有無を従属変数として多重ロジスティック回帰分析を行ったところ，閉塞性肺機能障害と口腔機能管理が，術後肺炎の発症に有意に関連する因子として抽出された．また，手術後に術後肺炎と診断されるまでの日時を経時的に観察しLog rank testにて有意差が得られた．

セルフケア指導の効果の良否については，有効なデータが得られなかった．

【考察】本研究では，口腔機能管理を行うことが術後肺炎を低下させる因子として検出され，**口腔機能管理は術後肺炎予防に有用である**ことが示唆された．反対に閉塞性呼吸障害に関しては術後肺炎のリスク因子として検出された．また，術後肺炎発症患者を検討すると，口腔機能管理を行うことで，術後肺炎を発症しても軽症で済む可能性があると考えられた．

【結語】肺がん患者に対しての**口腔機能管理は術後肺炎予防に有用である**と考えられる．